

第5章
台湾原住民の織物技術に関する
調査研究

5-0—[はじめに]

●台湾原住民の伝統的な服飾は織物が主な素材となっている。諸族の機織の道具は類似しており、多くは木製の経箱(経糸ビーム)及び数本の棒からなる水平式織機である。織の道具は簡単であるが、さまざまな知恵を駆使し、諸族文化において特色ある美しい織物を創り出してきた。近代の原住民は国民教育の影響を受けて、多くが腰機(Backstrap loom)、あるいは改良された簡易織機で織物を織っている。

●台湾原住民の織物は、他の民族の織物と同様に一般的に縞文様、綾文様、三角形、及び菱形文様を基本的な装飾文様としている。彼らの織物は平織と斜文織が中心となりながら、それから発展させた複合構造や特殊技法が盛装の製作に応用された。これら巧妙な製織技法は、過去の織りの断絶時期を経て、今回の調査地域においてはすでに見られなくなっていた。

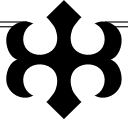
●台湾原住民のカラフルな錦織のほとんどは、完全に手間を掛けた花織であり、その織りは自動化された織機の「通経」(緯糸がすべての経糸に対して通し糸となる)方式では織り出すことができない。そのため、織り出された織錦は、いずれも大変貴重なものである。本文は調査活動の中で採取した織物と刺繍品を研究題材とし、それら織物の構造、組み紐の組み方、刺繍技法をまとめる。



5-1—研究背景

●台湾原住民の織物の技術は、昔から直接体で覚え、口で伝えながら伝承してきたため、文字や図録などの記録資料はまったくない。1895年以降50年間の日本統治時代には機織が禁止されており、また終戦後の現代化の衝撃により、現在は手織の技術を知っている年配の人も少なくなり、伝統的な手織の技術は失われつつある。1999～2002年、台湾輔仁大学の織品服装学科は、中華民国行政院原住民委員会の経費補助を得て、また諸教員の専門的な指導を得て、「台湾原住民伝統染織工芸師の育成」プログラムを二年間実施した。文化・デザインの授業のほか、主には織・刺繍・服装製作の実習を行った。その中で、織物の技術の面では、参加者たちが伝統的な原住民の整経・製織の技術を習得した上で、私が分析したタイヤル族の伝統織の方法に従って、伝統的な織文様を織り出し、失われた技術の再現を行なった。

●教育プログラムが終わって、私はそれらが原住民の織物のほんの一部に過ぎず、実際、諸族の貴重な織物技術にはまだまだ研究保存の必要があると感じ、輔仁大學の中華服飾文化センター及び台中縣立文化センターのコレクションを用いて継続的な分析研究を行った。十数年間、すでにタイヤル・タロコ・セディック・ブヌン・プユマ・パイワン・ルカイ・タオ・サイシャットなど、諸族の織物の図案と構造を記録した。2009年末からは日本神戸芸術工科大学の「台湾原住民文化に関する調査研究」活動に参加し、原住民集落における現地調査を通して、原住民の伝統的な生活スタイルと織物の近況を知ることができた。また、過去研究の中で一部の疑問を明らかにすることができた。



5-2—研究目的

●台湾原住民諸族の代表的な織物は、世界の少数民族の織物芸術の中で高い評価を受けており、コレクターたちにとっても織物工芸の珍品である。しかし、現在一部の貴重な技術の消失が進むことにより、既存の織物への分析を通して織物技術を復興・保存し、未来への展開・創造に繋げていくための参考資料とすることが期待される。そのほか、台湾原住民の織物の技術は、他の国に暮らす太平洋南島語系の原住民と関連がある可能性も否定できない。20世紀初頭、アメリカの考古学者が撮影したフィリピン北部の山間部の原住民Tinguian族が使用していた織機は、台湾原住民(タオ族)の伝統的な腰機に大変類似している。これらの地域の織物の技術や文様については、今後さらに比較研究を持続的に行う必要があると考える。

5-3—調査研究の地域的範囲

●台湾原住民の服飾技術は、概ね織・刺繍・珠繍(ビーズステッチ)、および貼布(パッチワーク)の四種類がある。本研究の調査においては、台東県の太麻里、高雄県茂林郷の多納、屏東県霧台のルカイ族とパイワン族が十字繍(クロスステッチ)を好んで行なっていたほか、タロコ・セディック・タイヤル・ガバラン・ブヌン・プユマ・タオ族の地域では織りが珍重されており、珠繍や貼布繍、直線平針繍などの技法は見られなかった。本文では本調査で採集したさまざまな技法について類型分析を行った。織りの構造のほかに、数少ないが刺繍と



組紐の技術についても紹介する。

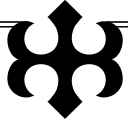
●本文は2009年12月18-25日、2010年8月11-18日、2010年12月25-30日、2011年8月5-10日、日本神戸芸術工科大学黄国賓先生に同行した現地調査活動の中で採集した服飾の資料を主な研究対象とした。その現地調査地域は以下に示したとおりである。

- ◆花蓮県秀林郷→タロコ族
- ◆花蓮県豊浜郷→ガバラン族
- ◆花蓮県吉安郷→アミ族
- ◆花蓮県萬榮郷→ブヌン族
- ◆台東県海瑞郷→ブヌン族
- ◆蘭嶼椰油村、野銀村→タオ族
- ◆台東県卑南郷→プユマ族
- ◆台東県太麻里郷→ルカイ族
- ◆屏東県来義郷、山地門郷、霧台郷→パイワン族、ルカイ族
- ◆高雄県茂林郷→ルカイ族
- ◆南投県仁愛郷→セディック族、
- ◆南投県魚池郷→サオ族
- ◆南投県信義郷→ブヌン族
- ◆苗栗県大湖郷、泰安郷→タイヤル族
- ◆台北県烏來郷→タイヤル族
- ◆桃園県復興郷→タイヤル族
- ◆宜蘭県南澳郷→タイヤル族

5-4—台湾原住民織物技術の特色

●台湾原住民の織機の中で、経糸の密度をコントロールするreedがなく、織幅の上で直接織幅を調整する。経糸の密度は比較的に高めになっており、荒い苧麻の繊維材質を使った手紡ぎであるた





め、ほとんどの織物が粗く厚いものとなっている。世界中の多くの織物と比較すると、台湾原住民の織文様の種類は限られており、主には平織(plain weave)と斜文織(twill weave)の二種類の基本組織が主流となっており、二重組織(double weave)や朱子織(satin weave)、蜂巢組織(honeycomb weave)、模紗織(imitation Gauze)、ねじり織(distorted thread weave)、パイル織(pile weaves)など特殊な織組織は見られない。しかし、台湾原住民は文様や色彩を豊かにするために、早くからたいへん上手に変化組織や複合組織、またはエリアごとに異なる組織を取り入れた聯合組織の織り方を生み出した。複合組織の中で最もよく見られるのが絵経(extra warp)と絵緯(extra weft)であり、これは主に装飾文様を織る技法として、重要な祭典で着る華麗な盛装に使われる。日常服の織物は、その多くが縞紋や斜紋、菱形を装飾としており、その文様や色彩が大変シンプルなものである。一方、盛装のために発達した織錦は台湾原住民の織物の高度な技術や芸術を代表する。これらの織物は、多くは裏面から織っており、工程が複雑で大変手間がかかる。このような高度な織物技術は、その多くがすでに失われており、研究のポイントとなる。

●織り構造の良し悪しは直接その文様の効果に影響し、また織物の堅牢度を評価する重要な要素である。織物の文様が複雑で色の数が増えると、織り構造の応用と浮糸の処理ははるかに複雑になる。原住民諸族の織物の構造からは、技術の違いが明らかにみられる。

●原住民は、製織の際に足と腰の力を加減することで、経糸を上げるとき(経糸を緩める)と緯糸を打つとき(経糸を引っ張る)の張力を加減し、刀杼で緯糸をしっかりと打ち込む。このような方式で織った布は、一般的な織機で織った布と違った効果が見られる。後者は織る際にその経糸がずっと張力を受けているため、箎で緯糸を打つとき経糸



が緊密にくっつくことができなくなる。

●台湾原住民の織物技術は、西洋の織物の構造についての考えと違いがあるが、その主な理由はその異なる織機の機能や制限に関係する。織機の機能が制限されたときに、人類はその制限を乗り越えるための方法を考える。たとえば、苗栗県泰安郷のタイヤル族の一部縞状の装飾文様は、経糸の色設定とわずかな綜紵を用いて、数種類の花文様を作り出している。また、宜蘭県南澳郷のタイヤル族は、五本糸を一組にした双経花織技法及びパイワン族が横縞文様を織るときに用いる双面織りは、いずれも稀に見る珍しい技法である。そのほか、台湾原住民が使用する織機は、布を織る途中でも、織り文様の変化の際に必要な応じてシャフトを取替えることができるので、この点は技術の操作上大変便利である。それに対し、Dobby loomは固定的な綜紵通しの規則(harness draft or drawing-in-pattern)の制限を受け、一枚の織物を織る時に、必ずあらゆる図案がその限られた綜紵数の制限内で織らないといけない。この点は、現代Dobby loomを用いて原住民の複雑な錦織りを複製する際に、必ず解決しないといけない問題であり、また技術転換を必要とする最も重要なポイントである。

5-5—技術報告(織りの道具)

A. 織りの道具

●織りの道具においては、以下の項目で述べる。

❶—台湾原住民伝統的な織りの道具❷—台湾原住民の現在の織りの道具❸—タオ族の整経とzong guan bangの設置❹—* * 式織機とDobby loomの技術的な論理比較。



*fig.1 ↑ (上) 蘭嶼椰油村のタオ族の腰機 (黄國賓撮影)

*fig.2 ↓ フィリピンの原住民の機織。経糸の端を前方の壁に固定し、両足で一本のT字型の踏み棒を踏みつけている。

(画像の出典: (https://dl-web.dropbox.com/get/Field%20Musuem%2C%20Tinguian%20Blankets%2C%20FCCooper%20collection/Field%20Mu.%20Cole%20photos/DSCF0237.JPG?w=d65248d3))



5-5A-1 台湾原住民の伝統的な機織機の道具

●台湾原住民諸族が使用する伝統的な織機は類似しており、織りの道具は硬質の木と竹で製作される。主には、整経台、経箱、固定棒、分離棒、糸綜紵、経糸引き上げ棒(経糸の揃うための片端が尖がった棒)、綜紵棒、刀杼、板状の杼、布巻き挟み、籐編の腰当てで構成される。原住民は織物を織るとき、一般的に経箱の下に2本の木の棒を敷いて、織り手が足裏で経箱を押しながら操作しやすくする。しかし、蘭嶼のタオ族は重い木製の経箱を使わず、その代わりに約49Cmの長さで直径が4Cmと5Cmの楕円形の棒(経巻具)を使う。この棒は床より少し上の壁面に固定される→*fig.1。昔、タオ族は製織の際に、一本のT字形の竹製の足踏み棒があり、その直線状の部分を前方の壁面に押し付け、両足で踏み棒の両端をコントロールしながら、杼口と経糸の張り具合を調節する。現在は、昔の足踏み具の代わりに、一本の長い木の棒を横方向においている。タオ族の腰機の道具はフィリピンのLuzou山地Tinguianの原住民が使っている織機と非常に類似している→*fig.2。しかし、後者は経糸の密度をコントロールする竹製の箎が一本ある。



5-5A-2 現代台湾原住民の織り道具

●三回のフィールド調査の中では、蘭嶼のタオ族が伝統的な床に座って織る織り方を今に受け継いでいることを見る事ができた。しかし、台湾本島に住む中年から若い原住民の学生たちのほとんどは、輸入されたドビー織機(Dobby loom)→*fig.3や足踏織機→*fig.4、或いは改良式織機で機織をしていた。原住民が織り方を変えた理由として以下の四点が考えられる。

①—縦と横の織物構造は、異なる織り方での複製が可能である。

②—原住民が新しい技術への受け入れた。伝統的な腰機の操作は手を動かすだけではなく、腰や足の力が必要であり、非常に大変である。

③—現代の織機ではもっと幅広い織物を織ることができる。

④—ドビー織機で織ると組織の変換がすばやくできる。

●ドビー織機はその便利性があるが、その綜統の枚数に制限がある。一部原住民の複雑な錦織の場合、高機の綜統の枚数の範囲を超えているため、そのような状況では、手動で経糸を数えながら文様を作らないといけなくなる。また、一枚の織物に数種類の異なる文様が織り込まれている場合には、原住民の伝統的な腰機の方が有利になる。織機的设计概念が異なることにより、その技術運用の論理も異なっているのである。

●現代の原住民は、輸入簡易帯織機(Inkle loom)を用いて帯を織っている。それは切り目のない循環型の整経方式を以って、奇・偶数の糸を交互に引き上げながら織る最も単純な平織の帯である→*fig.5。花織の場合は、地経のほかに1組の経糸(絵経extra warp)を追加し、文様に従って経糸を引き上げる(挑経)→*fig.6。或いは、二本の基本の緯糸(地緯)の間に文様の必要に従って色糸(絵緯 extra weft)を加えることもある。この二種類のいずれの方法でも、文様帯を織ることができる。



①—*fig.3→ドビー織機 烏来 タイヤル族 彭玉鳳

②—*fig.4→足踏織機 烏来 タイヤル族2010/12

③—*fig.5→タロコ族の平織の帯

④—*fig.6→金属素材で作ったInkle Loomによる絵経(Extra warp)紋織り—彭玉鳳

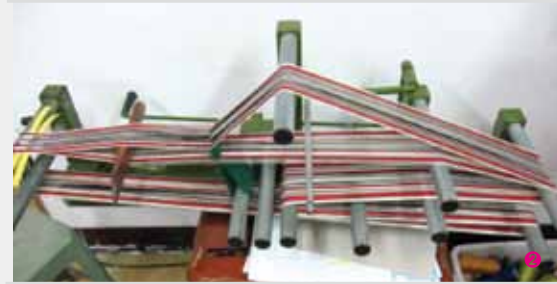


台東県卑南郷と屏東県来義郷では、Inkle Loom 帯織機を用い、数枚の四方形の四つ穴のカードを付けて、カード織(Tablet weaving)の技術を利用して菱紋の帯を織っていることを見た→*fig.7。なお、苗栗件泰安郷では原住民がInkle Loom 様式に基づき、伝統的な腰機の操作原理を融合させた、金属パイプを以って作った改良式の織機を見た。パイプを増加することにより、平織だけではなく斜文織、菱形の文様を織ることができる(*fig.8、*fig.9)。なお、いくつかの部品を取ると、織機を整経台として使うことができる。これらはすべて台湾原住民が近年外来織機道具を取り入れて、新しく創り出した方式である。

5-5A-3 タオ族の整経と綜統棒の設置

●布を織る前に糸を準備するほか、最も重要なのは整経作業である。タオ族は台湾のほかの民族と同様に、長方形の平板の上にビーム(木の棒)を立てて整経道具とする。整経の際には手で経糸を引っ張りながら一定の順番にしたがってビームに糸を巻き、必要な糸の本数になるまでその動作を繰り返す。経糸の長さは、仕立てる衣服の長さによって決められる。異なる長さの整経ができるように、タオ族の昔の木製整経台には十数個の穴が開けられ、織手は必要に応じてビームを適した穴に差し込んで、必要な長さの整経を行ってきた。われわれが蘭嶼で見た現代式の整経台は素材が金属になっており、その形も七本の棒に簡略化されていた→*fig.10。しかし、それでもタイヤル族の伝統的な整経台よりは、ビームが2本多いことになる。手動整経は、一般的に経糸を巻く際に、同じ場所で前後の糸を交差させることで経糸の並び順番を確保し、奇数・偶数糸を区別する。

●整経は一般的に単糸整経と双糸整経の二種類に分類する。台湾原住民の整経は二杼口(平織)と三杼口(三枚斜紋)の二種類がある。二梭口の

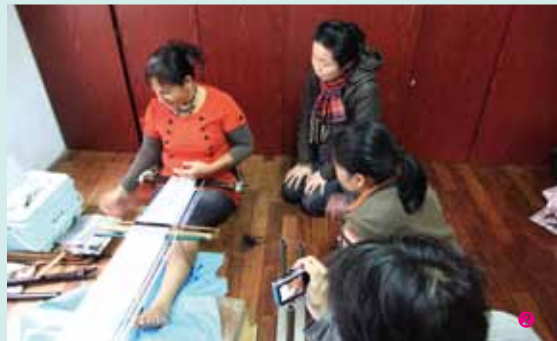


①—*fig.7→Inkle loom帯織機で卡片梭織技術を応用して菱形文様の帯を織る(左)台東県卑南郷、(右)屏東県来義郷

②—*fig.8→改良式のInkle Loom。写真は一組の糸綜統による平織。苗栗泰安郷梅園村高月英提供

③—*fig.9→苗栗泰安郷改良式Inkle Loom。一組の糸綜統を追加し、三つの杼口により斜紋や菱形紋を織る

④—*fig.10→タオ族の現代の整経台



整経は、開口分離具と糸綜統棒を利用して、奇数糸と偶数糸を順番に上下させることにより、平紋を織る。三杼口の整経には一組の糸綜統棒を追加し、一本の棒を上げるたびに三分の一の経糸が上げられる。このように順番に棒を上げながら、斜紋や曲折紋、菱形紋を織ることができる。



難しいテクニックが必要な織りは、紋織りの過程で二種類の異なる組織の文様を同時に織り込むものであり、前述の平織や斜文織のような基本的な装置以外に、それぞれの織紋の規則に従って経糸を引き上げて新たに分離棒または糸綜統棒を設置する→*fig.11。前の文様を織り終わり次の段の織紋を織り始める際、もし前の段の織紋に設定した綜統上げを共有できない場合、必ず分離棒と綜統棒を改めて設定する。綜統棒を設置しなおすときには、他の開口を妨害しないよう必ずそれぞれの棒の位置を良く確認する必要がある→*fig.12-1～12-3。

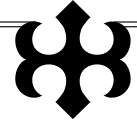


5-5A-4 腰機 (Backstrap loom)、ドビー織機、及び足踏織機の技術的論理の比較
 ●台湾原住民が使う腰機の綜統棒は、足踏織機の踏板と同じ機能をしている。布を織る際は、異なる綜統棒を引き上げることにより経糸の上げ糸を調整しており、それは足踏織機で踏板を踏み分けるのと同じである。原住民が文様を織る時に、綜統棒を入れ替えるのが、それは足踏織機で一つの文様を織り終わって異なる文様を織る際には、綜統と踏板のタイアップを変更させるのと同じ意味を持つ。



●足踏織機で経糸の綜統通しは、ドビー織機と同様に順番通し (straight draft)、山形通し (point draft)、セッション通し (section draft)などの方式

- ①—*fig.11→タオ族、織る前に織文様の必要によって経糸を引き上げて綜統棒を加える
- ②—*fig.12-1→蘭嶼の朗島集落でタオ族の女性が整経・製織する過程を見学
- ③④—*fig.12-2,12-3,→タオ族の織機は、分離棒と綜統棒を設置する際にその前後順番をよく確認しないといけない(蘭嶼椰油村)

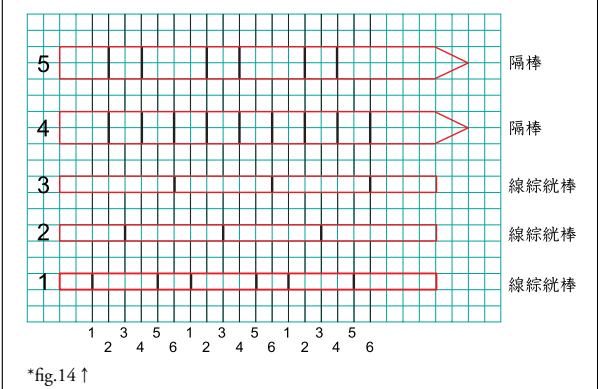
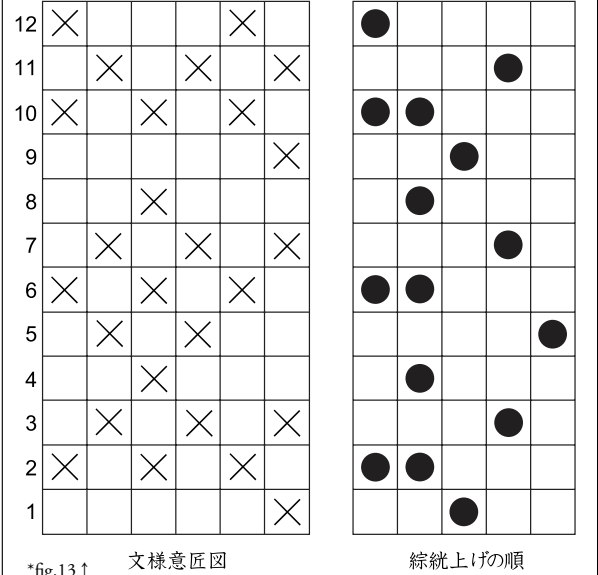
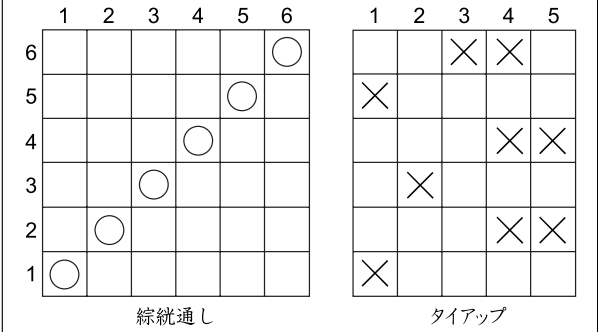


で行われる。緯糸を通して布を織る際には、足踏織機は一本の踏板を踏むごとに、一本から数本の綜統の経糸を同時に上げることができる。それは一枚の踏板に数本の綜統を同時に繋げることができるためである。これはドビー織機が緯糸を打つ際にそれぞれの綜統を一つずつ上げる方式と異なる。原住民の伝統的な織機はドビー織機と足踏織機の織り方とだいぶ大きな違いがあるが、その織り文様の構造やタイアップの面では理論的に相通ずる。簡単に言えば、一つの織物の技術図にとって、三種類の織機はその操作を示す図は異なるものの、実はドビー織機のタイアップ図は、足踏織機の場合は踏板と綜統との結びを示す図であり、腰機の場合は綜統棒による経糸の引き上げを示す図である。(注:タイアップ図とは、機織の際にどの綜統を上げるかを示した図である)。

●たとえば:三種類の異なる織機の綜統通し図と文様意匠図が同じであるとしたら、ドビー織機の綜統を上げる順番は:(1)6, (2) 1.3.5, (3) 2.4.6, (4)3, (5)2.4, (6)1.3.5, (7) 2.4.6, (8)3, (9)6, (10)1.3.5, (11)2.4.6, (12)1.5。この12回の綜統上げをまとめると、合計5種類の上げ方がある。(タイアップ図を参照→*fig.13)

●もし足踏織機で織る場合、その踏板の数は合計五本になり(タイアップ図を参照)、1本目の踏板は1と5枚目の綜統棒に、2本目の踏板は3枚目の綜統棒に、3本目の踏板は6枚目の綜統棒に、4本目の踏板は2と4と6枚目の綜統棒に、5本目の踏板は2と4枚目の綜統棒に連結される。この部分は腰機の場合に必要な綜統棒の数および経糸を上げる設定と同じであり、下記の順番とおりに踏板を踏みながら緯糸を通す。(綜統上げの順番図)(1)3枚目, (2)1と2枚目, (3)4枚目 (4) 2枚目(5) 5枚目(6) 1+2枚目 (7) 4枚目(8) 2枚目(9) 3枚目 (10) 1+2枚目(11) 4枚目(12) 1枚目。

●腰機の織り方は足踏織機と類似した理論に基づき、その文様を織るためには同じく5本の棒が必要



となる(タイアップ図を参照→*fig.14)。しかし、棒を設定する際には必ずその順番についてよく考えてからにしないとイケない。たとえば、前の1、2、3本目の3本は必ず糸綜統棒を使い、4本目の綜統棒の前に置かないといけない。それは、前の三本の経糸はすべて4本目の分離棒の下に敷かれており、それらを前面に持ってくることで糸綜統を使って経糸を上げることができる。そうでない場合には糸が絡んでしまう。



5-6—技術報告(織文様の種類)

B. 台湾原住民の織文様の種類

●台湾原住民の織文様の構造は(weave structure)、平文組織と斜文組織、およびこの二種類の基本組織から発展した変化組織、たとえばひとつの完全組織(repeat)内で、二種類の異なる織文様を交互に組み合わせた複合組織(たとえば絵緯、絵経)、或いは一枚の布地上で、区域毎に異なる織文様を織り込んだ聯合組織がある。織物構造配列の組み合わせは非常に変化が多いため、これまでの台湾原住民の織物技術に関する紹介は、一般的に大まかな類型を記述するに留まっている。複雑な錦織の細かい構造変化について詳しい説明がなされてこなかったのは、その主な理由として原住民が織物の技術に関する資料を残してこなかったことが挙げられるが、その他に、花織の技術について正確に説明するためには、専門家がそれぞれの織物について細かい分析と試し織りを行わなければならず、これまでその面における研究資料がかなり欠如していることも重要な理由として挙げられる。本節では、過去数年間で本人が分



析してきた台湾原住民の伝統的な織物技術についてまとめる。一部の技術名称については、どうしても分類しきれない問題もある。たとえば、「絵緯」という複合組織は、その構造の組み合わせが多岐にわたり、また織の技術の面からも異なる特徴が見られるため、分類の際にはその主な特徴のみを考慮する場合がある。

●ここで特別に説明したいことは、台湾政府による原住民の伝統的な知的財産権に関する保護法律が制定され、台湾原住民の資料を用いた公的発表は、必ず有権者に使用許可を提出しなければならない。伝統技術に関する知的財産権の論争を避けるため、ここでは、その技術特徴と分類について述べるのみにする。

●台湾原住民の服装には、以下ような技術が用いられている。

❖[1. —平文織](plain weave)

●平文織(→*fig.15)は織構造の中でもっとも緊密な組織であり、二本の経糸と二本の緯糸からひとつの完全組織(repeat)を構成している。経糸と緯糸の密度が同じものを「正平文」と呼び、文様が方正である。もし、経糸の密度が緯糸より遥かに大きい場合、布面上に経糸が緊密に並び、緯糸



*fig.15(右)
*fig.16(左)

①	③
②	
④	⑤
⑥	
⑦	⑧

*fig.15→平文織
*fig.16→花蓮県豊浜郷芭蕉糸工坊(ガバラン族)
①—*fig.17→桃園県復興郷 王碧珠提供/タイヤル族
②③—*fig.18,19→細かい縞文様の平織/宜蘭県南澳郷/范美足織/タイヤル族

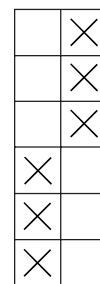
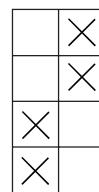
④—*fig.22→苗栗県泰安郷天狗部落/高月英提供/タイヤル族
⑤—*fig.23→宜蘭県南澳郷/彭秋玉提供/タイヤル族
⑥—*fig.26→南投県昭和文物館提供/プユマ族
⑦⑧—*fig.27→宜蘭県南澳郷/范美足織/タイヤル族/裏面

がほとんど経糸に隠れてしまう効果となる。このような平文を「顕経平文」という。台湾原住民の平文織は(→*fig.16～19)、一般的に経糸の密度が緯糸の密度より大きい。特に、経糸による縞文様を織り出す場合、すべて顕経平文織となっている。たとえば、経糸が黒と白が一本ずつ並ぶなら、黒と白の縞文様が現れる。

❖[2. —平文花織](plain weave with the pattern picked out on the warp)

●平文花織は平文組織を基本組織とし、二種類の異なる色の経糸が1:1の順に並び、経浮(→*fig.20,22)または緯浮(→*fig.21,23)によって文様を現わす方法である。経浮による花織は、杼口の下に沈んでいた経糸を引き上げて、経糸による浮き文様を作る方法である。通常経糸の飛び数は三本までとする。一方、緯浮による花織は、緯糸が経糸を三本以上(五本、七本)跨って、浮きあがった緯糸による装飾効果を生み出す方法である。(→*fig.23の黒色斜文を参照)

❖[3. —経畝織組織](warp rib weave)



*fig.24(左)→経浮二本
*fig.25(右)→経浮三本

●変化平織の一種。杼口が開くたびに、二本以上の緯糸(経浮二本以上)を入れる(→*fig.24,25)。経糸の密度が高いと、表面からは緯糸がほとんど見えない。プユマ族とアミ族の男性が使う橙・黄・黒灰色の縞文様の腰帯(→*fig.26)は、いずれも経畝織を地組織としながら、一部の縞に経浮(黒)と緯浮(橙)組織を利用した浮き文様を作っている。

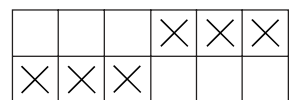




①—*fig.29-1→輔大織博館收藏/ブヌン族 ②—*fig.29-2→台中県立文化中心編織工芸博物館收藏 ③—*fig.29-3→ブヌン族(表と裏面の写真)

◎宜蘭県南澳地域のタイヤル族の多色織錦は、経畝織を基本組織とする(→*fig.27)。大きめの文様が特徴で、地糸を浮かせて文様を表すため、手間がかかり、大変複雑に見える。南澳織錦は、経糸と同じ色の地緯を用いるのではなく、直接二、三本の色系で織り出すため、色系は表の文様として浮き上がるか、または平文の間に挟み込まれ、織物の背面には緯浮の糸が見られない大変丈夫な構造をしている。

◆[4. —経畝織組織](weft rib weave)



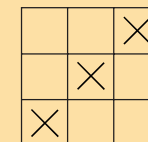
*fig.28→緯浮三本

◎これも変化平織の一種である。三本の経糸を合わせて一本化し(緯浮三本→*fig.28)、間接的に経糸の密度を下げることで、上下の色緯糸が緊密に並び合って、経糸をほとんど完全に覆い隠す。完全に緯糸によって文様が表現される織り方である。それぞれの色緯は、連続通経方式で織物の左右両側を往復し、異なる色の絵緯は、同

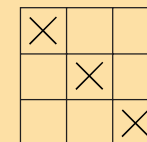
じ織り方で交互に文様として現れる。表に出ない緯糸は、浮緯として布地の裏面に沈む。文様に多くの色を使うほど、裏面の浮緯が厚くなる。このような織り方は、ブヌン族の女性が男性の盛装を織る際に用いる特殊な技法である(→*fig.29-1～29-3)。

◆[5. —斜文織](twill weave)

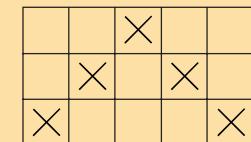
◎最も小さな斜文の完全組織は三本の経糸と三本の緯糸から構成され、「三枚斜文(three - leaf twill)」とも呼ばれる。その特徴は、主に表面に連続的な右斜文(twill to the right→*fig.30)、或いは左斜文(twill to the left→*fig.31)を形成する。山の形で綜続通しすると、左右対称の山形斜文(zigzag twill weave→*fig.32)と菱形(diamond twill→*fig.33)を織ることができる。台湾原住民の織物は、通常二上一下の経浮斜文(→*fig.34)が多く、しかも経糸の密度が高くて、布面上の斜文の角度が45度以上となる(→*fig.35～37)。



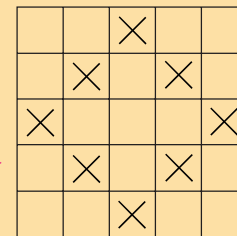
*fig.30
一上二下右斜文



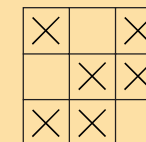
*fig.31
一上二下左斜文



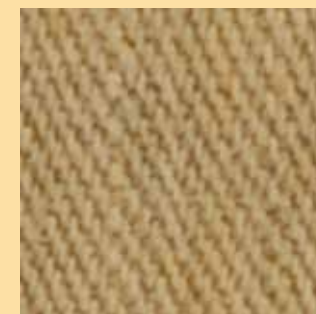
*fig.32
山形斜文



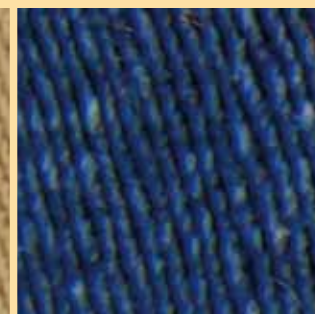
*fig.33→
菱形



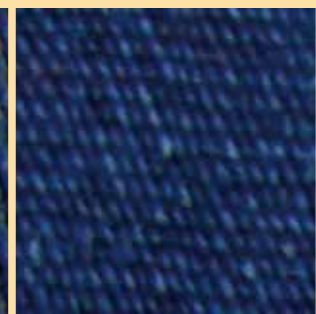
*fig.34
二上一下の右斜文



*fig.35→45度以上の二上一下左斜文



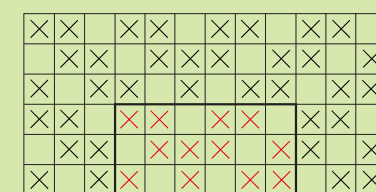
*fig.36-1→斜文織の表面



*fig.36-2→裏面



*fig.37→二上二下右斜文



*fig.38→文様意匠図 weave diagram



*fig.39-1,39-2→山形斜文/南投県信義郷双小学校提供/ブヌン族



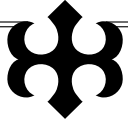
*fig.40-1→文様意匠図 weave diagram



*fig.40-2→裏面



*fig.41→凹凸稜紋



❖[6. — 山形斜文](zigzag twill)

●綜続通しの際、同じ方向に数回通し、再び反対方向に数回通す。緯糸を打ち込む際には、ひとつの循環単位で数回繰り返して打ち込むことにより重層的な大きな菱形文様を織り出す(→*fig.38)。ブヌン族の織物は、大きな山形斜文織の白地が一般的である(→*fig.39-1,39-2)。

❖[7. — 変化斜文組織](fancy twills)

●タオ族の紺・白による菱形の花織は、それぞれ五本経浮の菱形斜文織と平織を組み合わせた混合組織である。経糸は白、緯糸は紺色とし、裏面を見ると緯糸の密度がかなり高いことが分かる(→*fig.40-1,40-2)。

●また白色の横縞には立体的に文様が浮き出ている(→*fig.41)。その文様組織は、同じ方向の二組の斜文織(二上一下の左斜文と一上二下の左斜文の組み合わせ)から構成されており、さらに菱形緯浮で菱形文様を表している。

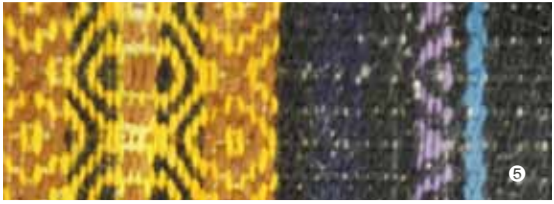
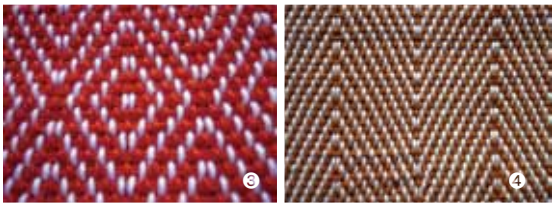
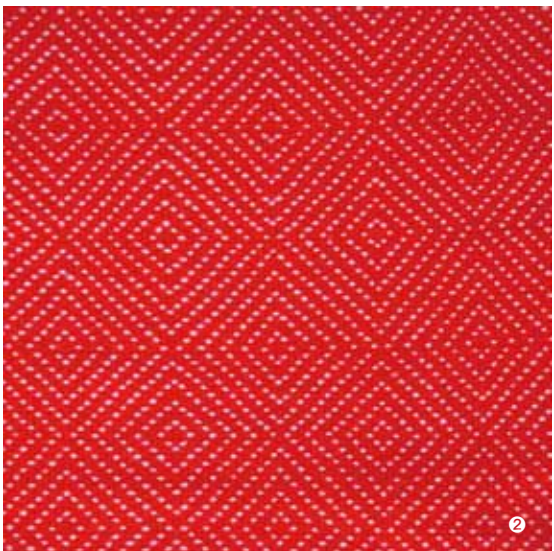
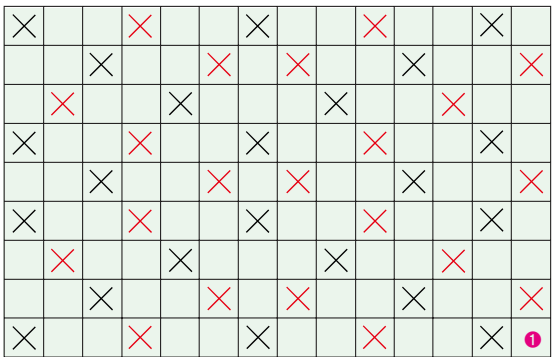
❖[8. — 双経単緯の菱形組織](diamond twill)

●赤と白の二色の経糸を一本ずつ交互に並べ(1:1)、赤色の緯糸を用いると、赤地に白点の菱形文様が織り込まれる(→*fig.42-1,42-2)。もし緯糸を白糸にしたら、白地に赤点の菱形文様となる。

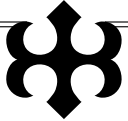
●他に、絵経組織(extra warp)に類似した2色経糸の変化組織による菱形文様がある(→*fig.43-1,43-2)。台湾中部泰安郷のタイヤル族の織物によく見られる縞状の装飾文様であり、異なる色の経糸を巧妙に並べた変化斜文織により、多様な小型菱形の連続文様が織り出される(→*fig.44-1,44-2)。

❖[9. — 絵経](extra warp)

●絵経は、基本的な一組の地経のほか、一組の色経を加えて文様を作り出す技法である。新たに追加した色経を「絵経」と呼ぶ。台湾原住



①②—*fig.42-1,42-2→宜蘭県南澳郷/范美足織/タイヤル族
③④—*fig.43-1,43-2→南投県仁愛郷/霧社/セディック族/張媽媽提供
⑤⑥—*fig.44-1,44-2→天理大学参考館収蔵/台中県泰安郷/タイヤル族



①—*fig.45→台北県烏来/林美鳳提供/タイヤル族
②—*fig.46→天理参考館収蔵/桃園県復興郷
③—*fig.47-1→天理参考館収蔵/セディック族のミリ織
④—*fig.47-2→天理参考館収蔵/セディック族のミリ織/裏面

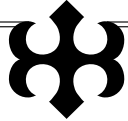


民の織物の中で、タイヤル族は最もこの技法に長けている(→*fig.45)。絵経は、エリア別に異なる組織や色彩を組み合わせてことができ、全体的に多様な色文様を組み合わせた変化に富んだ構成を可能にする。一般的に、地経と絵経の並びは、1:1(AB)または1:2(ABB)で規則的である。桃園県復興郷では二色経糸を一定の比例に従って並べた独自の整経が見られる(→*fig.46)。地経(ground warp)をA、色経をBとした場合、ABABAの順に並び、地経と色経の合計五本が一組となる。これらの多くは平織を地組織とし、経糸を浮かして文様を表現する。

●南投県仁愛郷のセディック族の「ミリ織」は、一組の黄土色を地経とし、一組の赤の浮経(warp flot)を用いた平織組織である(→*fig.47-1,47-2)。2組の経糸は1:2の比、つまり、1本の黄土色の経糸と2本の赤色の経糸が組み合わせられる。経糸の飛び数は常に3本となり、全体的に赤い経糸による菱形の文様が浮き出ている。

❖[10. — 絵緯](extra weft)

●「絵緯」とは、平織或いは斜文織を地に、絵緯を加えて文様を作る技法であり、その追加した色緯糸を「絵緯糸」と呼ぶ。これは台湾原住民の伝統的な織物における装飾文様の表現に多く使われる織り方である。絵緯糸は一般的に地緯糸より太く、撚りが緩い柔らかい毛糸を用いているため、通常の密度で打ち込まれているにも関わらず、その絵緯糸により浮かび上がる文様が綴じ目をすっかり隠すことができる。製織の際に、もし綜続の設定と異なる文様を織る場合は、手動で経糸を引き上げながら文様を織り出す。これまでの多くの資料では、このような絵緯の織り方が、上下の地緯糸の間に絵緯糸を挟み込んで織ることから「挟織」と表現している。しかし、「挟織」という言葉は、その織り方の様子を形容しているのみで、専門用



①—*fig.48→南投県信義郷/銭美芳提供/
セデック族/平織
②—*fig.49→国立台湾博物館/平埔族/斜文織
③④—*fig.50-1,50-2→桃園県復興郷/碧織屋/
タイヤル族/織物の表面。織物の裏面

語ではない。

●絵緯組織を用いた花織については、(1)文様配置 (2)織り方(3)構造の組み合わせなど、大きく三つの視点から考察することができる。

①——絵緯の文様配置

[a]——局所的な横縞状の装飾は、無地の織物に局所的に絵緯糸を加え、縞状の装飾を施す。

[b]——全面または大面積に、絵緯による連続的な大型文様を織り込む。

[c]——点状に分散された小さなエリアに、絵緯による装飾文様を施す。

②——絵緯の織り方については、

[a]——通経単色絵緯

[b]——通経多色絵緯

[c]——裏面に緯浮糸や切断された緯糸が見られる絵緯、などに分けて以下に述べる。

[a]——通経単色絵緯

●いわゆる「通経」とは、製織の際に緯糸がすべての経糸の杼口を通過しながら往復することをい



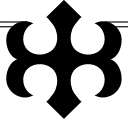
う。この種類の織物は、ほとんど四方連続文様になる。また、一色の絵緯と地緯が決まった比例で並べられ(たとえば1:1の比、つまり1本の地緯に1本の絵緯の組み合わせ)、規則的な文様を織り出す。タイヤル族・セデック族・サイシャット族の一部のシンメトリの幾何学文様や、平埔族の赤色の単色文様は、その多くがこの技法を採用している(→*fig.48～50)。織物の表面と裏面は、その地と図の色が相反した文様となっており、裏面の方が緯浮が比較的に少ない。

[b]——通経多色絵緯

●これは単色の経糸と多色の緯糸を用いた花織の技法の一つである。*fig.51で見られる織物は、白の地緯と赤・黒の絵緯が、それぞれ1:1:1の比で並び、赤または黒の絵緯糸は表に浮き上がっているか裏面に沈んでいる。そのため、織物の裏面には、通経単色絵緯の技法で織られた織物に比べると、より多い緯浮糸が見られる。経糸の密度が大きい場合、上下の色緯が緊密に並び合っ



[c]——裏面に浮緯或いは断緯のある多色絵緯



①—*fig.51→
台北県烏来 タイヤル族/彭玉鳳織
②—*fig.52→天理大学参考館収蔵
③④—*fig.53-1,53-2→
国立台湾博物館収蔵/平埔族。裏面

●このような織り方は、一般的に多くの色彩を使う。それぞれの絵緯糸は織物の表面に現れるか裏面に隠れるため、裏面には多色の遊び糸が浮いている。台中県泰安郷北勢群タイヤル族の新婦の結婚衣装はこの技法で織られる(→*fig.54)。経糸と緯糸の綴じ目が少ないほど、不安定な構造となり、糸が引かれたり、捻られて変形したりしやすい。そのような場合は、丈夫な平織の生地縫い合わせ、遊び糸を固定する方法が使われる。

●断緯とは、絵緯糸を用いて花織をする際に、経糸との綴じ目の位置から絵緯糸を直接打ち込み、その色または文様のエリアだけで絵緯糸を往復させる織り方である。なお、文様が終わるときまたは緯糸を交換するときには、絵緯と経糸が綴じる位置で緯糸を切り離して完了する。

●パイワン族の首長の花織の織物は糸の並びが緊密で、絵緯糸はほとんど織物の表面に浮き上がっており、裏面には文様と文様の間の地の部分に浮き出た糸の遊び糸が見られない。織り手は巧妙に断緯方式を用いて、裏面の浮緯を減らし、織物の重量を軽減している。パイワン族の多色織錦は、すべて断緯方式を用いている(→*fig.57)。



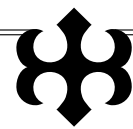
また、その地組織は細い糸からなる緊密な斜文織であり、他の粗糸を用いた経密度の低い平織を地組織とする多数の織物と比べると、かなりの難しい技を必要とする。経密度が高いほど絵緯を緊密に打ち込みに難くなるので、経・緯密度ともに高い多色絵緯組織は、明らかにその難度が高くなる。

●タロコ族の六角形の小紋が点状に施された織物は、一本の緯糸を文様の両端で左右に往復しながら文様を出しているため、これも断緯絵緯組織である(→*fig.58)。

③——構造の組み合わせ

●絵緯の構造の組み合わせから見ると、それは混合組織の一種である。それは地組織と絵組織の二つの部分に分けて考えることができる。台湾原住民の織物は平織と斜文織を地とし、文様表現は、一般的に規則的な斜文織または変化平織を用い、不規則文様は極めて少ない。台湾原住民の絵緯など複雑な組織の織物には、驚くべき創造力が認められる。特に、パイワン族の喪服に使用される織物は、実に巧妙ですばらしい。絵緯技法の中でも珍しい両面組織を用いるため、非常に





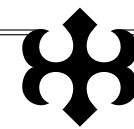
*fig.54 ↑ 苗栗県大湖郷/簡雲生提供/タイヤル族
 *fig.55-1 ↓ 台中興立文化中心織博館/バイワン族
 *fig.55-2 ↓ 地組織は斜文織/織物の裏面
 *fig.56 ↓ タロコ族の織物の小紋/桃園県復興郷/王碧珠提供



*fig.57-1 ↑ 南投県昭和文物館提供 アミ族。織物の裏面(経密度が高く、緯浮長は11本)織物の裏面(経密度が低く、緯糸の飛び数は七本)
 *fig.57-2 ↑
 *fig.57-3 ↑



*fig.58-1 ↑ 天理参考館収蔵/タイヤル族
 *fig.58-2 ↑
 *fig.58-3 ↑
 *fig.58-4 ↑



*fig.59-1,59-2 ↑ ↑ 南投県昭和文物館提供サイシャット族/表面と裏面
 *fig.60-1,60-2 ↑ 天理参考館収蔵/ブユマ族/織物の表面と裏面
 *fig.61-1 ↓ 天理参考館収蔵/バイワン族/表面
 *fig.61-2 ↓ 天理参考館収蔵/バイワン族/裏面



*fig.62-1,62-2 ↑ 天理参考館収蔵/ブユマ族/表面と裏面



*fig.63-1,63-2,63-3 ↑ ↑ 天理参考館収蔵/ブユマ族/表面と裏面(中)
 *fig.64 ↑ 輔仁大学中華服飾文化センター収蔵



緊密な構造となっており、分析の際には大変苦労した。絵緯構造の組み合わせについては、以下の数種類にまとめる。

[a] — 平織の地に、
変化平織の緯浮花織の組み合わせ

●単経双緯を用い、その中の白の地緯は白経糸と交差して平織の地を構成する。赤の絵緯は7:1の比で経糸と交差しながら、浮き文様を作る。タイヤル族とサイシャット族の織物は、一般的に地緯と絵緯の比を1:2とする。白の平織の地は、表に浮かび上がった赤の浮糸に隠される。経密度が高いほど織物の裏面には縞文様が目立たなくなる。飛び数の長さは一般的に五本または七本であり、長いものは11本に達するものもある。赤緯糸の替わりに黒糸または赤と黒を同時に使う場合があり、黒と赤を交互に用いた花織では、赤と黒が交互に文様を作る(→*fig.57-1 ~ 57-3)。

[b] — 平織の地に、緯浮花織の組み合わせ

●タイヤル族の絵緯は一般的に平織の地に、綜統棒(または手動の経糸引き上げ棒)を用い、通経(または断緯)方式で花織を行う(→*fig.58-1 ~ 58-4)。タイヤル族の緯浮は一般的に3本を基本単位とするので、表の飛び数は三本、六本、九本などとなる。平埔族の文様はシンメトリではあるものの、緯糸の飛び数の本数が不規則である。製織の際、たとえば赤と青の二色の絵緯糸があるとしたら、地緯糸(白)と二色の絵緯糸(赤・青)の比は、一般的に1(白):1(赤):1(青)となる。

●サイシャット族の長衣に使われる経畝織は、タイヤル族南澳群の織物と同じように見えるが、サイシャット族の織物には三本の緯糸の中に一本の白色の地緯糸が含まれており、赤と青の絵緯糸は表面に文様として浮き出たり、または遊び糸として裏面に浮き出るか、白い地に織り込まれており、織物の背面は断緯がなく、かなり堅実な構造となる(→*fig.59-1,59-2)。

[c] — 斜文の地に、緯浮の菱形花織の組み合わせ



●プユマ族の多色花織の断緯組織がその一例である(→*fig.60-1,60-2)。地は二上一下の斜文織であり、菱形文様の左右対称の斜文と異なって、その斜文は一定の方向を示す。

[d] — 変化平織を地に、両面斜文織の組み合わせ

●パイワン族の喪服の織物は、珍しい両面絵緯の花織である(→*fig.61-1,61-2)。絵緯は表に見られるだけではなく、裏面でも表面ほど密ではないもののはっきり見られる。黒色の地緯糸は、表裏のいずれの面でもあまり目立たず、織物はかなりしっかりしている。

[e] — 相反する二種の変化平織の組み合わせ

●プユマ族の織物でよく見られる十字型の文様は、その地緯と絵緯が相反する二種類の変化平織(一上五下と五上一下の緯浮)を組み合わせて構成されている(→*fig.62-1,62-2)。文様はシンプルで整然としており、断緯花織により織り出されている。近代の一部の復元作品には、これらの伝統文様を、織りではなくクロスステッチの方法で表現したものがある。

[f] — 相反する二種の斜文織の組み合わせ

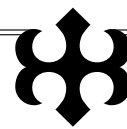
●四上一下の斜文織を地とし、緯浮斜文織(一上四下の緯浮)を組み合わせている。一定の織り方の規則にしたがい、異なる絵緯糸を用いて断緯・花織を行なう(→*fig.63-1 ~ 63-3)。

❖[11. — 織+繡]

●ツォウ族の胸当ては、白色の経糸に鎖刺繡の技法で織る(→*fig.64)。経糸三～五本ごとに一針ずつ鎖刺繡を行い、逆の「人」の形の構造を形成する。二色の文様を出す場合は、二つの針で交互に経糸に刺繡していくため、布の裏面には遊び糸が残される。

❖[12. — クロスステッチ]

●ルカイ族やパイワン族、プユマ族の服飾は、ク



ロスステッチを多く用いる。一般的には、経緯密度が比較的低い黒色の平織の生地、二本の経糸と二本の緯糸から構成される方形を単位とし、それぞれの方形で「×」の形に縫い付ける方式である。台湾原住民のクロスステッチ作品の中で、非常に繊細なものは1cmに十個の「×」を縫い付けいる。この場合は、経緯密度の高い綿布に刺繡を施すので、かなり難度が高くなる(→*fig.65)。

❖[13. — 平行直線繡]

●平行直線繡は、同じ方向の直線に刺繡して文様を作る技法である。そのほかに、図と地の空間表現や、刺繡密度が異なるものがあるが、同じ技法を使用しているため、それらも同類に分類した。台湾原住民の中でルカイ族が最も刺繡に長けており、その中には大変独特なものとして、多色の重層的な菱形文様の刺繡がある。同じく無地の生地(黒)に色糸による花織や刺繡を施した面構成の文様を、中国では「納錦」という。このような文様は織錦の効果がある(→*fig.66)。

●ルカイ族には、また白色の平織の生地、直線で黒色の文様を刺繡する技法があり、これは絵緯花織に類似する(→*fig.67)。なお、中部日月潭の辺に暮らすサオ族の服飾には、点線状に連続三角文様が刺繡されている(→*fig.68)。

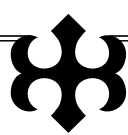
❖[14. — 交差斜文繡]

●台湾原住民は、二色の交差した斜文繡を用いて、さまざまな装飾や刺繡綿布を衣服に縫いつけ



①—*fig.65→南投県昭和文物館提供/ルカイ族
②—*fig.66→南投県昭和文物館提供/ルカイ族
③—*fig.67→屏東県霧台郷/丁秋英提供/ルカイ族
④—*fig.68→南投県日月潭/石阿松提供/サオ族
⑤—*fig.69→南投県昭和文物館提供/ルカイ族
⑥—*fig.70→屏東県霧台郷/ルカイ族文物館





る。刺繍方法は、まず生地縁を五本の平行斜線状に縫い、それから別の色系で反対方向に交差して五本の斜線を刺繍する。交差していない部分が三角形を形成する(→*fig.69,70)。

◆[15. — ビーズ刺繍]

●ルカイ族とパイワン族の貴族の豪華な盛装は、ビーズ刺繍による装飾を施す。まず、文様と色を設定してから、長針にビーズを通し、文様に従ってビーズを布上に仮留めする。円形のビーズのほかにパイプ状のビーズもあり、その刺繍方法は同じである(→*fig.71-1 ~ 71-3)。

◆[16. — 貼布繡]

●貼布繡は、一枚の無地の綿布に文様の形に切り取った色布を縫いつけ、色布の輪郭線に沿って毛布の縁縫い(blanket stitche)の方式で、しっかりと生地固定し、さらに外縁の輪郭を「逆鎖繡」して、文様を強化する。貼布繡の文様は自由に表現できるが、ほとんど伝統的な文様が用いられている(→*fig.72)。

◆[17. — うなぎ骨繡]

●原住民の服飾の背面や肩掛けなど、二枚の布



を縫い合わせる場合に使う。重なり合った交差斜文で突出した立体的な直線を形成する。「人」字の形に編みこんだ縄のようであり、色を換えて段を作ることで、装飾効果が増す(→*fig.73)。その刺繍方式は異なる経路で行う2種類の方法があるが、最終的な効果には影響しない。

◆[18. — 組紐ボタン](braid of frog closures)

●八本の糸で編み、パイワン族やルカイ族の女性の盛装に使われる。八本の糸は、主要色(黄色)の糸四本と補助色(赤と緑)の糸二本ずつで構成される(→*fig.74)。編み終わった紐は、二本の黄色の線があり、紐ボタン造形の輪郭線となる。紐ボタンは一本の紐を湾曲させて形を作り、縫い付けて固定する(→*fig.75)。

◆[19. — 三色の編紐帯]

●パイワン族とルカイ族の服飾や一部用品の装飾に使われる。黄・赤・緑の三色の毛糸、それぞれ二本ずつ使って、合計六本で編む(→*fig.76)。編むときは、六本を結び合わせて固定し、それから最も外側にある二本の同色の糸を真ん中に交差させながら持ってくる。



①

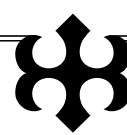
②

③

④

⑤

①—*fig.71-1→屏東県来義郷/ 蔣梅貞提供/ルカイ族
②③—*fig.71-2,71-3→南投県芬園郷昭和文物館提供ルカイ族・タオ族(右)
④—*fig.72→南投県芬園郷 昭和文物館提供
⑤—*fig.73→輔仁大学中華服飾文化中心 収蔵/ブユマ族



①—*fig.74→南投県芬園郷昭和文物館提供/ルカイ族
②—*fig.75→屏東県霧台郷/ルカイ族文物館
③—*fig.76→屏東県来義郷 許春美提供/ルカイ族
④—*fig.77→南投県芬園郷 昭和文物館提供/ブユマ族



◆[20. — 織物の仕上げ紐]

●製織が終了すると、前後両端に残された経糸を切り離し、その経糸を小さく束ねて紐状に撚りを付ける。その方法は、織物を平らに開いておいてから、一組に数本ずつの二組の経糸を取る。二組の糸をまっすぐに引っ張りながら掌と太ももの間に挟んで、各組の糸に同じ方向の強い撚りを付け、最後に二組の糸を合わせて一緒に反対方向に撚りを付ける(→*fig.77)。



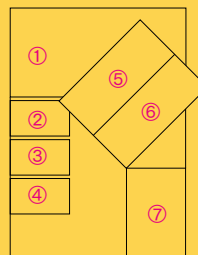
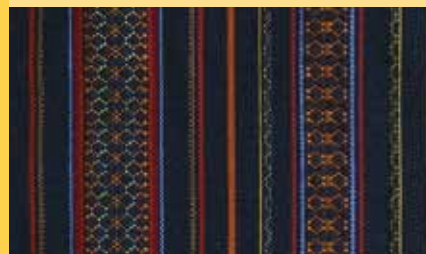
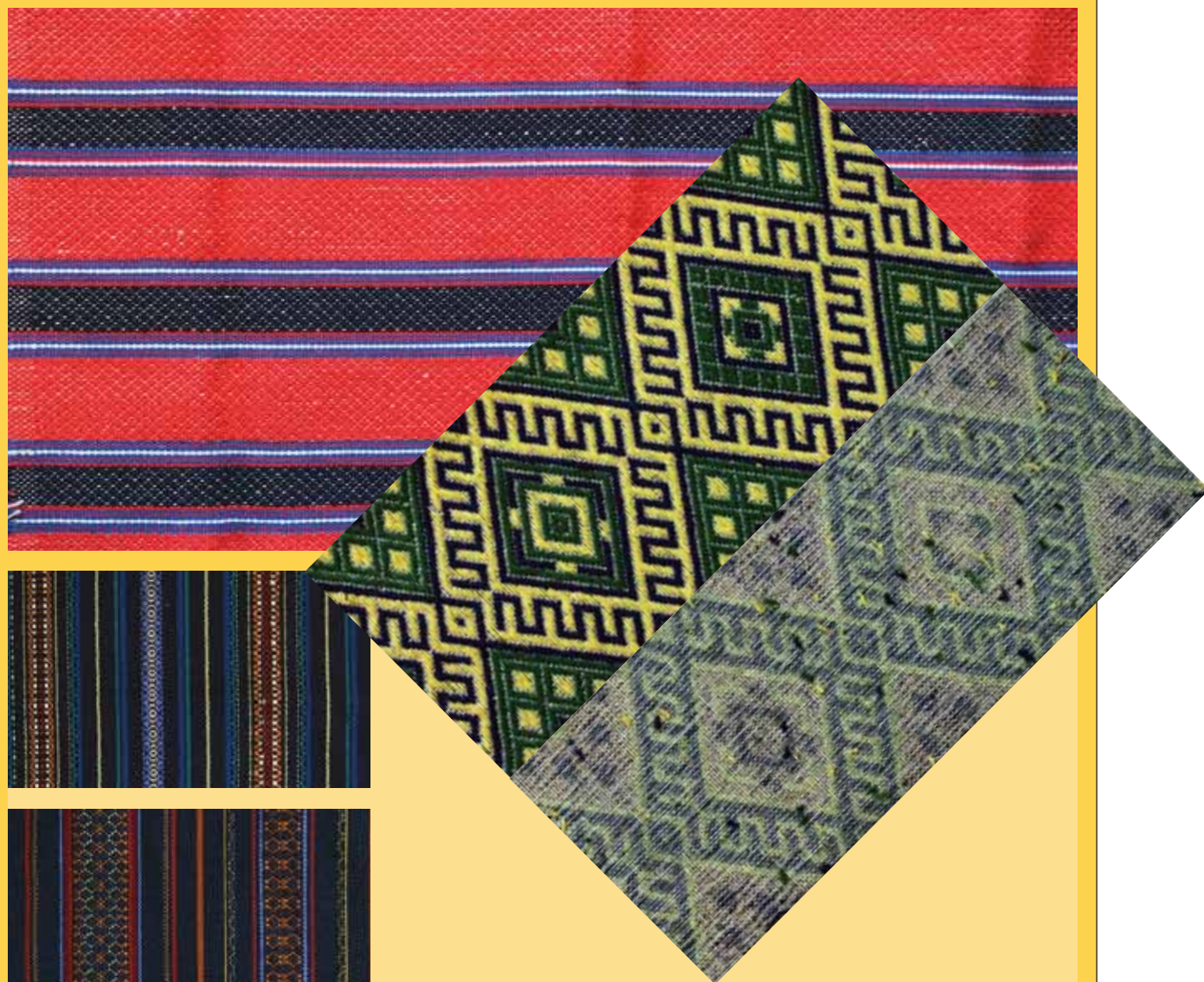
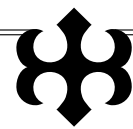
5-7— 研究成果



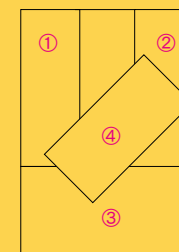
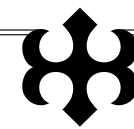
●フィールド調査の際、訪問者に提供してもらった織物については、撮影の許可を経て写真記録を行なった。これらのサンプルに対しては、博物館のような具体的な観察や研究・分析を行うことはできなかったものの、本研究チームのメンバーの精密な撮影により、織物の構造の細部を写真に残すことができた。

●下の写真¹⁾は、そのほとんどが本人が過去数年の間に分析研究を重ね、試作した織物である。台湾原住民の一部の織物は、その文様は大変類似しているように見えるものの、実際よく観察するとその織り方が異なる場合がある。明らかに、それは織り手が機織をするときに個人的なアイデアを加えた結果である。また、古い刺繍作品を分析するときには、縫い目の間違いによりアンシンメトリ文様になったり、異なる文様を組み合わせるとき、限られたスペース内に収めるために任意的に文様を変えていることもある。そのため、文様を記録する時には改めて修正を行う必要がある。しかし、原則的にはそのオリジナルのデザインに基づくようにした。以下の作品は、各族の代表的な織物を研究して、複製したものである。



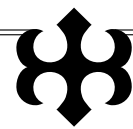


- ①—*fig.78→絵経/タイヤル族 (セディック族の「ミリ織」に類似)
- ②—*fig.79→双経単緯の菱形/タイヤル族/泰安郷
- ③—*fig.80→絵経 タイヤル族/泰安郷
- ④—*fig.81→蔡玉珊試作織物/タイヤル族
- ⑤⑥—*fig.82,83→経歟織(緯浮花織)タイヤル族南澳郷(表面と裏面)
- ⑦—*fig.84→絵緯/タイヤル族/泰安郷

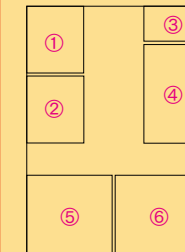
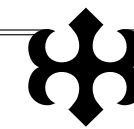
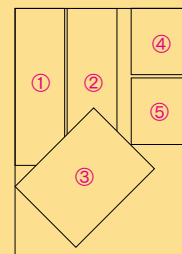


- ①—*fig.85→絵経/タイヤル族/南澳郷
- ②—*fig.86→絵経/タイヤル族/仁愛郷
- ③—*fig.87→経歟織/タイヤル族/南澳郷
- ④—*fig.88→絵緯/タロコ族/秀林郷

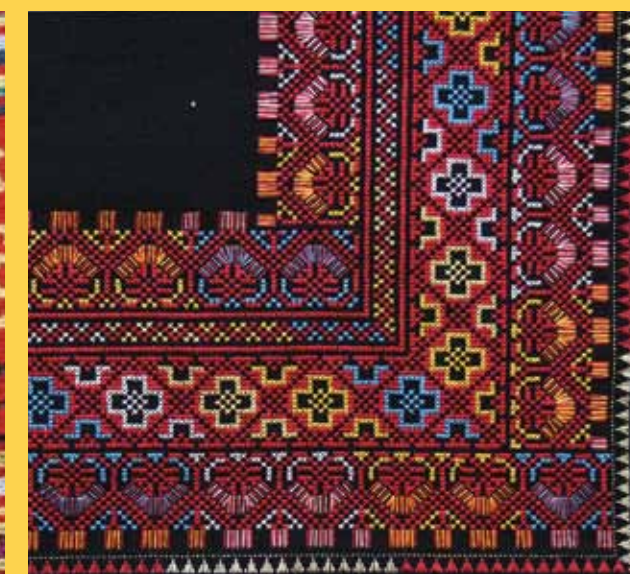
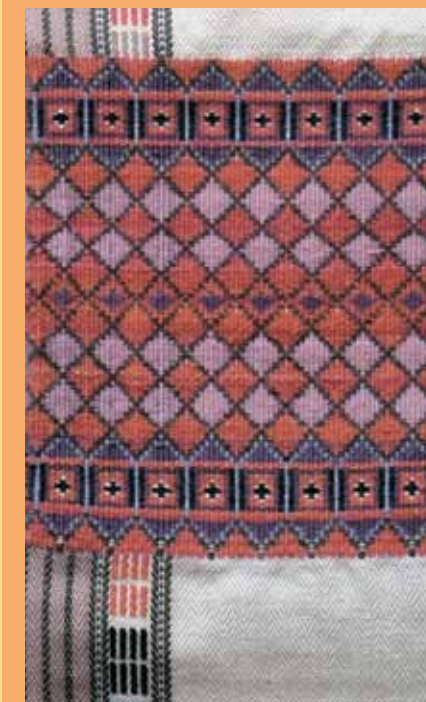


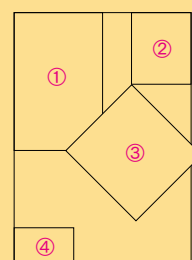
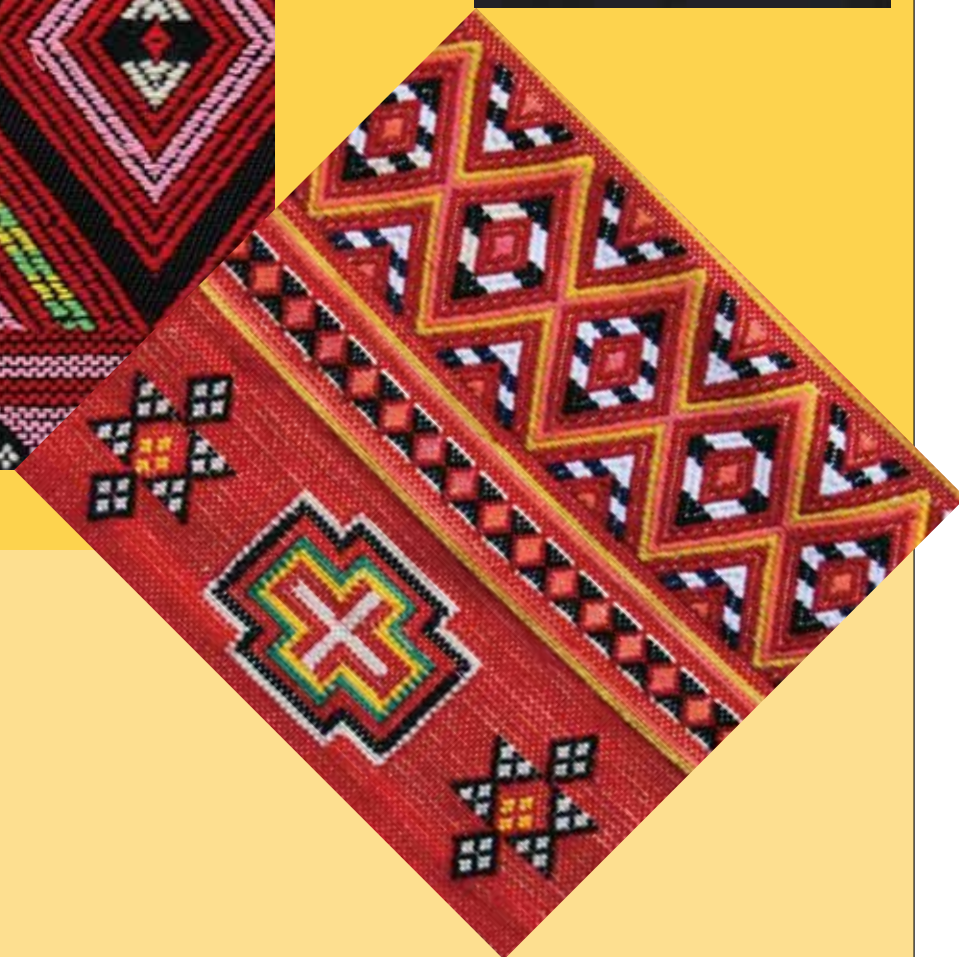
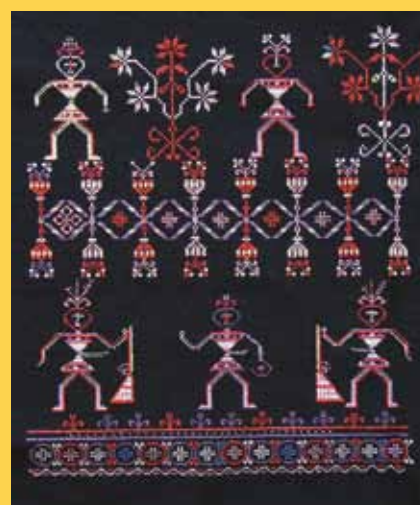
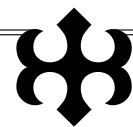


①②—*fig.89,90→絵経/セディック族/仁愛郷(ミリ織)
 ③—*fig.91→蔡玉珊試作織物/セディック族
 ④⑤—*fig.92,93→双経単緯の菱形/セディック族/仁愛郷
 (表面と裏面)

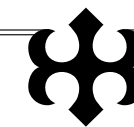


①②—*fig.94,95→変化斜文織/タオ族
 ③—*fig.96→平行直線織/ブヌ族
 ④—*fig.97→緯軟織、絵緯/ブヌ族/花蓮萬榮郷
 ⑤—*fig.98→織+緯/ツォウ族/阿里山
 ⑥—*fig.99→クロスステッチ/ツォウ族



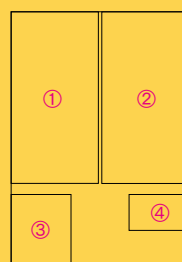
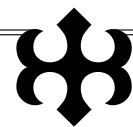


- ①—*fig.100→特織/ピュマ族
- ②—*fig.101→十字織/ピュマ族
- ③—*fig.102→特織/ピュマ族
- ④—*fig.103→蔡玉珊試作織物/ピュマ族

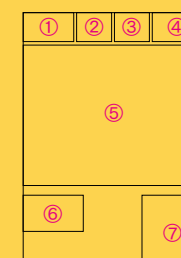
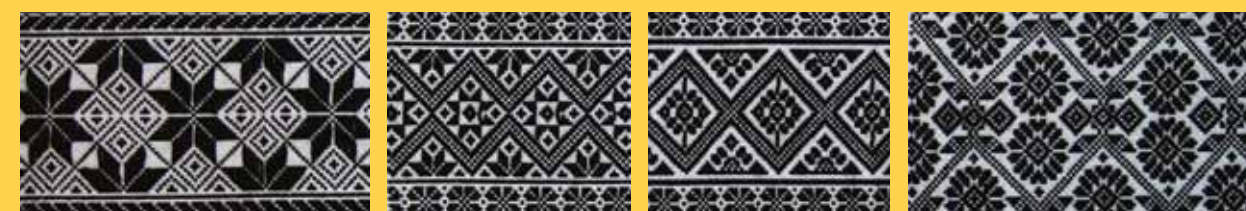
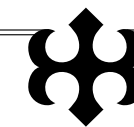


- ①②—*fig.104,105→絵織/バイワン族/裏面花織
- ③—*fig.106→特織/バイワン族
- ④—*fig.107→蔡玉珊の平行直線織の試作/バイワン族
- ⑤—*fig.108→特織/バイワン族
- ⑥—*fig.109→平行直線織/バイワン族
- ⑦—*fig.110→クロスステッチ/バイワン族
- ⑧—*fig.111→クロスステッチ/バイワン族
- ⑨—*fig.112→蔡玉珊試作織物/バイワン族





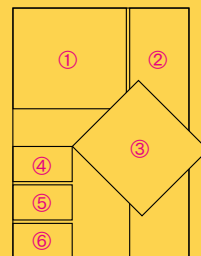
①②—*fig.113,114→絵織/サイシャット族/表面と裏面
③—*fig.115→特織/サイシャット族
④—*fig.116→蔡玉珊試作織物/サイシャット族



①②③④—*fig.117,118,119,120→平行直線織/ルカイ族(本作品は特織組織で織った)
⑤—*fig.121→蔡玉珊が絵織組織で平行直線織の文様を織る/ルカイ族
⑥—*fig.122→クロスステッチ/ルカイ族
⑦—*fig.123→平行直線織/ルカイ族



①—*fig. 124→クロスステッチ、平行直線繡/平埔族
②—*fig. 125→絵繡/平埔族
③—*fig. 126→クロスステッチ/平埔族
④⑤⑥—*fig. 127, 128, 129→蔡玉珊が平埔族の錦織を織る/
平埔族⑤表織⑥裏織



5-8—あとがき

●2010年8月11-18日台湾南部を訪問したとき、山間部の険しい道路と交通の不便さは、われわれに深い印象を残した。われわれの専用車が屏東霧台郷と多納村に向かう途中、ところどころに崖崩れが残り、簡易の狭い道路や道端に散乱している石ころには随分心を冷やしたものだ。2009年夏の水災以来、山間部の道路はまだ完全に復旧されず、山間地域に居住する人々の生活やその観光産業に大きな影響を及ぼしていた。

●織物産業の面では、原住民の民族衣装を仕立てる専門店が数件見られたが、少数の工芸家がクロスステッチやビーズ刺繡を行っているほか、一部高度な伝統織技術や刺繡工芸はすでに失われていた。元来の伝統的な花織はクロスステッチに簡略化されており、以前の難しい織り文様は簡略化されて、簡単な織り方で文様の表面的な特徴だけ真似ていた。

●三地門郷水門村のある店舗では、海外で手作りしたり機械刺繡を行った輸入品を販売していた。そこには、台湾原住民の伝統的なテキスタイルや各種服飾素材を真似た商品が大量に並んであった。当地の豊年祭で見た多くの若者の豪華な民族衣装は、商店で購入したものであった。これは、今や避けられない流れになっている。

●台湾政府は、近年多くのプロジェクトを立ち上げ、原住民の各種産業の発展を支えてきた。しかし、失

われた精緻な技術を原住民の集落において新たに芽生えさせ、継続的に発展させることは大変重要な課題である。そのため各族の中に研究開発チームを組織し、民族のブランド及び販売ルートを作り、各族が自分の伝統的な織りや刺繡の優れた品質を正しく認識できるようになるまでには、まだ長い期間にわたる努力が必要となるだろう。

5-9—致謝

●私をこの3年間にわたる研究プロジェクトに参加させていただいた黄国賓先生には大変感謝する。おかげさまで、私は実際集落に直接足を運び、当地の原住民の人からたくさん教えをいただくことができた。毎回の調査において、異なる専門分野の研究者たちが互いに交流を重ねたことは、私に大きな刺激となった。また、輔仁大学織品服装学系及び台中県立文化中心には、織物の収蔵品を研究のために提供していただき大変感謝している。なお、この数年間の研究活動の中で、諸族の分析資料や写真資料の整理、一部刺繡品の復元作業に協力してくださった蔡琬珠女史にも感謝の意を示す。最後に、日本文部省の研究経費により本研究プロジェクトを円満に終了することができたことについては、本当に心より感謝を申し上げる。

執筆/輔仁大学織品服装学科 蔡玉珊